



| Data | |
|------|--|
| 監督: | ジョージ・ルーク |
| 脚本: | ポー・ウィリモン |
| 原作: | ジョン・ガイ『Queen of Scots: THE TRUE LIFE OF MARY STUART』(スコットランド女王: メアリー・スチュアートの真実の生涯) |
| 出演: | シアーシャ・ローナン/マーゴット・ロビー/ジャック・ロウデン/ジョー・アルウィン/デヴィッド・テナント/ガイ・ピアース |

👁️👁️ みどころ

エリザベス女王(1世)の物語(武勇談?)はたくさんあるが、本作は『ふたりの女王』というタイトルながら、女性監督の“趣好”によりメアリー女王にウエイトを置いた珍しい映画。16歳にしてフランス王妃兼スコットランド女王になったメアリーは自信満々でスコットランドに戻り、13歳年上のイングランド女王エリザベス1世の王位継承をも目論んだが・・・。

王位継承を巡る権謀術策と権力闘争のドロドロ感是中国の王朝ドラマでも顕著だが、女性監督による本作は中盤でも終盤でもそのドロドロ感がすごい。子を産めば勝ち!それが本来の王道だが、メアリー女王がそうならなかったのは一体なぜ?

ちなみに、私は本作で馬上の凛々しき甲冑姿についてのベストドレッサー賞を考えたが、あなたの選択は?

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ヘレンとケイトの大女優に続いてマーゴットが! ■□■

大英帝国に君臨した女王として最も有名なのはエリザベス女王(1世)(1558年~1603年)だから、その女王役を演じるのは“大女優”と相場が決まっている。しかして、『クイーン』(06年)、『シネマ13』(185頁)ではヘレン・ミレンが、『エリザベス』(98年)とその続編たる『エリザベス: ゴールデン・エイジ』(07年)、『シネマ18』(174頁)ではケイト・ブランシェットという大女優がエリザベス女王役を演じていた。しかし本作では、『アイトーニャ』(17年)で実在のフィギア、スケーターのアイ・トーニャ役を演じたマーゴット・ロビーが演じている(『シネマ42』56頁)。

ちなみに、本作と同時期に公開された『女王陛下のお気に入り』（18年）では、アン女王とその新旧二人のお気に入りを巡る権力闘争が面白かった（『シネマ 43 掲載予定』）が、そこでは、アン女王役をベテランのオリヴィア・コールマンが演じて見事第91回アカデミー主演女優賞を受賞した。しかし、エリザベス女王と、彼女より概ね一回り（13歳）若いメアリー女王の二人を主人公とした本作では、若き日の“ふたりの女王”役に、ベテランの大女優は不向き。そこで、まずはエリザベス女王役として、“トーニャ役”を演じたマーゴット・ロビーを起用した。『アイトーニャ』（17年）では憎まれ役のトーニャ役がピタリ決まっていたマーゴット・ロビーだから、本作でも何かとメアリー女王に意地悪をする(?)エリザベス女王役に彼女はぴったり・・・？

■□■メアリー女王役はシアーシャ・ローナンが！■□■

エリザベス女王（1世）は超有名だが、彼女より13歳若い（だけの）同世代のメアリー女王はあまり知られていない。それはエリザベスが「イングランド女王」としてスペインの無敵艦隊に勝利するなど長年にわたって君臨してきたのに対し、メアリー女王は治世も短かった上、政敵によって長い間の幽閉生活を余儀なくされていたためだ。本作のパンフレットには、佐藤友紀氏の「驚きと新鮮さあふれる演出、凄味と奥深さのある演技」、君塚直隆氏の「メアリーとエリザベス ふたりの真実の世界」のコラムがあるから、あの時代の“二人の女王”を比較検討するためには、これは必読。また、パンフレットにある、「スコットランド&イングランド王室略系図」、「メアリー&エリザベス年表」、「歴史ミニ知識」も必読だ。

ジョージ・ルーク監督のインタビューによると、彼女は「メアリーに関する誤解を正したいという気がありました」とのことだ。そのため、本作ではどちらかというと、エリザベス女王よりメアリー女王の方にウェイトを置いている。また、ジョージ・ルーク監督はエリザベス役のマーゴット・ロビーよりも先に、メアリー役としてシアーシャ・ローナンを決めたいらしい。シアーシャ・ローナンはキーラ・ナイトレイと姉妹役で共演した『つぐない』（07年）（『シネマ 19』306頁）でアカデミー賞助演女優賞を受賞し、近時の『レディ・バード』（17年）（『シネマ 42』74頁）で主演女優賞にノミネートされた若き演技派女優だ。

本作は冒頭、1542年にスコットランドで生まれ、生後6日でスコットランド女王に即位し、幼いころにフランスに渡り、15歳でフランス王太子と結婚し16歳でフランス王妃となった後、18歳で未亡人としてスコットランドに戻ってくるメアリーの姿から始まる。メアリーはカトリックだが、スコットランドでは今プロテスタントが勢力を拡大しているらしい。そんなスコットランド女王兼フランス王妃たるメアリーを温かく(?)迎えた(?)のは、現在摂政として国を統一イングランドとも友好的な関係を築いている異母兄のマリ伯（ジェームズ・マッカードル）だが、さて彼の胸の内は・・・？

■□■王位継承を巡る権謀術策と権力闘争は？■□■

私は最近 BS 放映されている中国ドラマ“麗王別姫”を録画して中国語の勉強を兼ねて見ているが、そこでは中国流の王位継承を巡る権謀術策と権力闘争が面白い。他方、日本でお馴染みの“大奥”を描いた映画では、“お世継ぎ”を巡る大奥の女たちの壮絶なドラマが展開されているから、これも王位継承を巡る権謀術策と権力闘争だ。しかして、それは16世紀のイギリスでも同じだったらしい。

メアリーが1561年に18歳でスコットランドに帰国したことを聞いたエリザベスは、3年前の1558年に女王に即位した後、国王至上法と礼拝統一法を發布し、イングランド国教会を再確立させていたから、カトリックとの対立は決定的になっていた。

他方、イングランド王朝最大のテーマはエリザベスが誰と結婚するかだ。エリザベスには寵臣（愛人？）のロバート・ダドリー卿（ジョー・アルウィン）がいたが、どうもエリザベスは結婚は全く望んでいないらしい（現実にエリザベスは生涯独身を貫き、1603年に69歳で死去した）。すると、イングランド王朝の王位継承者は誰？

メアリーはフランス王妃兼スコットランド女王だが、さらにイングランド王の王位継承権も持っていたから、エリザベスやエリザベスの王位継承権を持つ者たちはメアリーに対して警戒が必要。そんな微妙な情勢下、メアリーは「私を後継者に指名すれば、あなたの王位を認めます」という手紙を、若さと美しさと自信あふれる肖像画とともにエリザベスに届けたが、その真意は？エリザベスとメアリーの“駆け引き”は、この時点では明らかにメアリーの方が有利だが、さてその後の展開は？

もっとも、メアリーはエリザベスに対しては自信満々の交渉ぶりだが、その内部はかなり不安定。なぜなら、「宗教の選択は個人の自由とします」という寛容な政策を打ち出したメアリーに対して、プロテスタントの長老派の指導者ジョン・ノックス（デヴィッド・テナント）は女性蔑視もあらわに大反発したためだ。メアリーは直ちにジョンを宮廷から追放したが、重責を担う国務大臣のメイトランド（イアン・ハート）も長老派の信徒だから、宗教問題も絡んだメアリーの内政の舵取りは大変だ。

■□■このドロドロ感に満足？それともうんざり？■□■

中国の王朝ドラマは戦いの物語と女たちの物語の両方があるので、ある意味「一粒で二度楽しめる」が、徳川時代の“大奥もの”の楽しさ(?)は、もっぱら女の争いのみみるドロドロ感。しかして、女性監督ジョージ・ルークによる“2人の女王”を主人公にした本作の中盤以降は2人の女王の権力を巡る思惑と男を巡る思惑のドロドロ感でいっぱいになっていくので、それに注目！

エリザベスがダドリー卿と結婚して世継ぎを産めばイングランド王の第一王位継承者が確定するから一番安心だが、エリザベスには結婚する気がないのだからそれは無理。そこ

でエリザベスが放った“奇手”は、寵臣（愛人？）のダドリー卿をメアリーの再婚相手に推薦したこと。ダドリー卿がメアリーと再婚すれば、うまくメアリーを手なづけてくれるだろうと目論んだわけだが、その点を巡る2人の女王の交渉は如何に？そこから始まる男女関係と権力闘争のドロドロ感、ややこしい。とりわけ、エリザベスの特命（？）を受けてメアリーと結婚したダドリー卿とメアリーとの蜜月関係が次第に冷え、同じくカトリックであるダーンリー卿（ジャック・ロウデン）と恋に落ちていく姿にはビックリ。さらに、その後メアリーは宮廷の反対を押し切ってダドリー卿と離婚してダーンリー卿と再婚したからアレレ・・・ところが、メアリーがすぐにダーンリー卿に幻滅すると、ダーンリー卿はメアリーの秘書官であるデビッド・リッチオ（イスマエル・クルス・コルドバ）と浮気（男色関係？）したから、更にややこしい。そんな中エリザベス1世の重臣であるウィリアム・セシル（ガイ・ピアース）の陰謀によって、マリ伯が反乱を起こしたから、メアリーは大変だ。

本作はジョン・ガイの原作に基づくものだが、このドロドロ感にあなたは満足？それともいい加減うんざり？

■□■馬上の甲冑姿は？ベストドレッサー賞は？■□■

『麗王別姫』でも、ある“女将軍”が馬上の凛々しい甲冑姿で登場し、巧みに刀剣を操って男たちをやっつけるシーンが登場する。それは当然ワイヤーアクションだが、マントを翻しながら空中高く飛び、刀剣を振り回す姿はカッコいい。美人女優がそれをやってくると、現実にはあり得ないと思っても、それはそれで楽しいものだ。

すると、16～17世紀のイギリスでも、必要とあらば凛々しい馬上の甲冑姿の女王さまが自ら馬にまたがって大軍を指揮していたの？多分そんなことはなだろうが、『エリザベス：ゴールデン・エイジ』ではケイト・ブランシェットの凛々しい甲冑姿が強く印象に残っている。また、そんな話しをしていると思いつくのは『茶々 天涯の貴妃（おんな）』（07年）（『シネマ18』178頁）で見た、和央ようかが扮した淀君だ。大阪冬の陣、夏の陣で総大将・豊臣秀頼の後ろ盾になったのは、太閤秀吉の側室の淀君。秀頼は秀吉の子ではなく、淀君と大野修理との間の子供だという説もあるが、それはさておき、『茶々 天涯の貴妃（おんな）』では淀君自身が凛々しき甲冑姿で馬にまたがり、兵を率いていたからビックリ！もし、これがホントの話なら真田幸村も後藤又兵衛も大喜びだっただろうが、これは映画だけの作り話だ。

しかして、本作では長い髪と長いスカート姿ながら、甲冑を身につけたメアリー女王が自ら、反乱を起こしたマリ伯（ジェームズ・マッカードル）を鎮圧すべく軍を率いて行進し、現実にある作戦を執行することによってマリ伯をやっつけてしまうから、それに注目！

しかして、あなたが選ぶ馬上の甲冑姿のベストドレッサー賞は『エリザベス：ゴールデン・エイジ』のケイト・ブランシェット、『茶々 天涯の貴妃（おんな）』の和央ようか、そ

れとも、本作のシアーシャ・ローナン？

■□子を産んだら勝ち！そう考えていたが・・・？■□

徳川家康は1人の正室と8人の側室に男11名、女5名の子供を産ませたが、秀吉は正室のねねに子供が生まれなかったのが最大の不幸だった。そのため、やっと手に入れた側室の淀君に最初の子供鶴松（幼名、葉（すて））が生まれると大いに喜んだが、残念ながら彼は数え3つで死亡してしまった。秀頼は2番目の息子だ。そう考えると、権力者は子供（世継ぎ）をたくさん産む（産ませる）のが何より大切な仕事だが、エリザベス女王は独身主義者だったから、後継者選びが大変かつ複雑になったのは仕方ない。

それに対して、メアリー女王はダーンリー卿との間の息子ジェームズを出産すると自信满满。馬上での甲冑姿によって、反乱を起こしたマリ伯を鎮圧したのもその時期だ。マリ伯に恩赦を与えて寛容な姿勢を世に示したメアリーは、エリザベスに対しては「代母になってほしい」と手紙を送り、その中で「あなたが子を産まない場合、私の息子を後継者にしてほしい」と提案したから、その策略ぶりはすごい。これ以上の戦争や不和を望まないエリザベスはメアリーのこの提案を受け入れたが、逆にメアリーの足下での混乱はひどい。宮廷はダーンリー卿と別居したメアリーにダーンリー卿との離婚を迫り、メアリーがそれを拒否すると、メイトランドはダーンリー卿を殺害し、その罪をメアリーに着せて退位させようと、ボスウェル伯（マーティン・コムストーン）を利用した。メアリーと結婚して3度目の夫になれば国王の地位が約束されるとだまされたボスウェル伯は、メアリーと結婚できたものの、一夜明けると「メアリーは不倫相手のボスウェル伯と結婚するために、夫ダーンリー卿を殺害させた」というジョン・ノックスの撒いた噂が国内に出回ったため、メアリーは息子の即位と引き換えに退位せざるを得なくなることになる。なるほど、なるほど。宮廷内の権謀術策と権力争いはここまで苛烈を極めていたわけだ。

中盤のドロドロ感でかなり食傷気味の私は、この終盤のドロドロ感でさらにお腹いっぱいになってきたが、それと同時に、中盤までは自信タップリだったメアリーの顔から自信が失われていく姿を見ていると、憐憫の情も沸いてくることに。そんな中、本作ではその後2人の女王が直接ご対面するクライマックスが登場するので、それに注目！メアリー女王とエリザベス女王の2人が直接ご対面するのは完全に史実を無視した本作だけのストーリーだが、さて、そこでこの“2人の女王”はいかに女同士の心を通じ合わせるのだろうか・・・？

2019（平成31）年4月3日記